

平成28年11月10日号

## 1 事業実施報告「文化財建造物保存・活用講座」(2016年度)

文化財建造物の保存・活用にあたっての課題を乗り越えるための専門的・事例的情報を提供する場として、会設立年度(2011年度)より実施している事業です。本年度は4回の実施を予定していますが、その前半2回の現地視察の様子をご報告します。なお後半2回は座学を予定しています。

## 第1回 現地視察「白井家住宅」(豊川市)

白井家住宅は江戸末期より造酒屋を営んでいました。2005年の酒蔵解体後、所有者の白井裕泰氏と高橋定信棟梁、白井ゼミの学生による主屋の修復工事が始まりました。現地視察当日は白井氏より建物解説をしていただき、修復作業の現場を見学させていただきました。参加者は修復手法について熱心に質問したり自由見学中に参加者同士で意見交換をしたりするなど、とても充実した時間を過ごせたようでした。

H28.7.28(木)	内容	参加者
10:00~ 12:00	○専門家(所有者)による建物の特徴や復旧工事に関する解説、建物見学 講師:白井裕泰氏(所有者/ものづくり大学名誉教授)	20名 (事務局含む)



▲白井氏より建物解説を受ける



▲自由見学をしながら質疑応答



▲2階より1階を見下ろした様子

## 第2回 現地視察「合名会社中定商店」(武豊町)

中定商店は武豊町小迎地区に残る唯一のみそ・たまりの醸造元です。所有者の中川氏より醸造元としての歴史やみそ・たまりの製造方法を、専門家の川口亜稀子氏より建築的特徴をお話しいただきました。蔵(史料館や製造蔵)の見学や、みそ玉みそシル(即席みそ汁の素)の手作り体験をさせていただき、参加者は、建築物への知識とともに、愛知の豆みそに対する愛着を深めたようでした。

H28.10.19(水)	内容	参加者
14:00~ 16:30	○所有者の方のお話 ○専門家による建物解説 講師:川口亜稀子氏(Liv設計工房) ○所有者による蔵内案内 ○みそ玉みそシルづくり体験	15名 (講師・事務局含む)



▲昭三蔵にてお話を聞く



▲川口氏より建物解説を受ける



▲みそ玉みそシル手作り体験

## 2 企画展「なごや折り紙建築」共催報告（2016年度）

主催：文化のみち榎木館 会場：文化のみち榎木館 会期：4月27日（水）～5月8日（日）

### ●折り紙建築からなごや折り紙建築へ

折り紙建築というのは一枚の白い紙に切れ目や窓の形を切り抜いて、二つに折った紙を開けると、その開く力で建物のシルエットが立ち上がる紙工作です。今回の展示では名古屋の近代建築を表現しました。

### ●見る展示と触れる展示

開くと立ち上がる様子を楽しんでもらうために閉じた状態で置いたところ、一般的な展示会では作品に触ることが出来ないの、じーっと眺めて「なんだろう?」と誰も手に取ろうとしません。

そこで、そこで解説するスタッフが会場で説明するようにしました。折り紙建築に触れて、実際の歴史的建造物に触れてもらう、そしてもっと五感で歴史的建造物を楽しむきっかけになるよう解説しました。こちらの意図を説明すると興味を持って喜んで下さる方が多くて、説明する側も楽しい時間を過ごすことが出来ました。

### ●子供向けワークショップ

いろいろな試みをする時にはなるべく子供が参加できるような工夫をしています。

価値のある建物も、その価値を知らなければただの古い建物になってしまいます。価値を知らないまま育つと、価値のわからない大人になってしまいます。自分で作った紙工作が実際に名古屋にある。楽しく紙工作をしながら、そのことを知ってもらうことから始めてみたいと思います。こうしたワークショップは地味ですが、いずれは価値の分かる大人に育ててくれることを期待して、今後も続けていくつもりです。



▲完成した折り紙建築



▲榎木館展示の様子



▲子供向けワークショップの様子

## 県内の登録文化財の活用事例紹介

vol.3

### 名古屋陶磁器会館

名古屋陶磁器会館のある名古屋市東区周辺は、明治～昭和にかけて輸出陶磁器産業の日本の中心地でした。

輸出陶磁器産業の基盤が確立された昭和7年（1932年）、名古屋陶磁器貿易商工同業組合の事務所として建設されました。日本の輸出陶磁器産業は今ではかつての勢いは失われてしまいました。しかし、名古屋に輸出陶磁器産業が栄え、日本の中心地であったことは業界だけでなく、名古屋の誇りでもあります。名古屋陶磁器会館は、その当時の隆盛を伝える貴重な役割を担っています。その存在価値が認められ、平成20年（2008年）には、名古屋市より景観重要建造物の指定を受け、同年、国の登録有形文化財建造物に登録されました。



▲名古屋陶磁器会館外観

### 佐地秀明（（一財）名古屋陶磁器会館理事長・愛知登文会副会長）

建物の維持・管理のため、昭和の終わり頃より、建物の大部分を事務所として賃貸をしています。レトロな雰囲気が好きで、デザイナーや設計士などクリエイティブな人たちの事務所が集まっています。平成8年（1996年）には、一階の一部を展示室に改装し輸出陶磁器の資料室として一般公開、絵付け教室、体験会を開催しています。平成22年（2010年）からは2階の大ホールを昭和初期の雰囲気を活かし改装することなく、時間貸室として一般に広く開放しています。これまでに、映画「ALWAYS 3丁目の夕日'64」やドラマのロケに使用されました。CMやカタログ撮影、企画展示、講演会、コンサート、ウェディングをはじめ各種パーティーなどに使用されています。



▲企画展「襖絵の回廊」の様子（2階大ホール）

### 3 寄稿文

#### 登録文化財「善立寺」との遭遇

愛知ヘリテージマネージャー 川島康治

岡崎市の「日蓮宗 善立寺」が国の有形文化財に登録されたのは、「あいちヘリテージマネージャー養成講座」で「私の見つけた登録文化財」で取り組んだことがスタートでしたが、私が善立寺を見つけるきっかけとなったのは、偶然と必然の重なりあった不思議なものでした。

私の菩提寺は島根県松江市にありますが、愛知県に移住して四代60余年になり孫の時代になろうとして、母の七回忌に当たり母のたっでの希望でもあり寺の住職の勧めもあって、自宅の近くに旦那寺を探すことにしました。ところが安城は一向一揆の本拠地でもあり、日蓮宗の寺院が一つもありません。そこで、自宅から公共交通機関で最も便利なところという選択肢で選んだのが、東岡崎駅からモダン通りを徒歩5分の「善立寺」でした。門前の看板に、「以前は安城市百々目木にあった。」と書かれてあり不思議に思い調べてみたところ、私の現住所の近くに室町時代松平宗家四代親忠公（550年前）が安祥城の裏鬼門の守護として創建し、松平宗家7代清康（徳川家康の祖父）の岡崎城入城で岡崎城下に移転し、江戸時代には現在地に移転したことが解りました。そして、両寺院の住職も合意の上墓土地も借地でき、晴れて檀家になることができました。

改めて現物を観てみると、歴史的遺産と云うだけでなく外観と云い書院造りの意匠と云いとてつもない文化財であると直感して、皆の協力で調査・研究して現在に至りました。特筆すべきは、天井の内陣の木彫極彩色の菊華紋格天井、脇陣の竹網代極彩色と家紋の格天井等他に類を見ない意匠の数々。それらが今日まで多くの研究者や学研の目に留まらずノーマークであったこと、焼失や建て替え等の危機を潜り抜けてきたこと。

まだまだ私達の様な職人やクリエイターとしての知識と経験、審美眼と直観力を必要としている建造物の多くが苔に眠っていて、私達の目に留まることを待っていることと想います。



▲登録文化財プレート石碑除幕式

#### 私の携わった「合掌造り」

なごや歴まちびとの会 前会長 石田 和義

「なごや歴まちびとの会」が平成23年に発足し、初代の会長として初めて携わった歴史的建造物が、現在緑区大高町にある「白雲閣」という建物です。

昭和30年代、白川郷、御母衣ダム建設により湖底に沈む村より移築された建物で、名古屋には同様のものが東山植物園に移築されています。大規模なものとしては、この2棟が現存しており共に歴史的建造物として文化的価値があるものと考えています。

「白雲閣」は個人の所有であり、移築より50年近くは高級料亭として名をはせていましたが、都市の発展に伴い交通アクセス等に変化等あり10年位前に閉鎖し、現在はオーナーがひとりりで守っているという現状です。「合掌造り」に関しては、調査した一部を次にお伝えします。

現在、世界文化遺産「白川郷、五箇山の合掌造り集落」で言う「合掌造り」は、「又首構造の切妻造り屋根とした茅葺の屋根」の事で、日本の他の地域には見られないこの地域特有の造りです。白川郷では荻町集落、五箇山では菅沼、相倉集落の3つの集落で構成されています。

このほか「合掌造り」を調査していく過程で、色々な言葉を知ることが出来ました。一例に、結、ネソ、コマ尻、総持ち、ウシノキ、ハガイ（材ガ1、コガ1）、他独特な部屋の名称等、生活に根差した文化的な深さを感じています。

今後とも「白雲閣」を通じて「合掌造り」の見識を更に深め、地域の方々との活動を継続して行きたいと、考えております。



▲白雲閣

## 4 愛知登文会便り

### 登文会のネットワーク構築にむけてー「公益信託大成建設自然・歴史環境基金」助成決定ー

愛知登文会のように、都道府県単位で所有者の会が作られ、活動を行っているところが愛知を含めて7都府県あります。愛知登文会では、これまで県外視察での訪問や保存・活用講座の講師として招くなどにより、大阪、京都、和歌山の登文会との交流を深めてきました。

それぞれの活動の現状や課題について情報交換を行う中で、共通する課題が浮かびあがり、それぞれが単独で取り組むのではなく、全国の登文会が協働して取り組む必要性を感じてきました。

そこで、平成28年度の公益信託大成建設自然・歴史環境基金に「登録文化財所有者の会のネットワーク構築ー全国組織の設立めざして」のテーマで応募したところ、助成が決定しました。来年10月までを活動期間とし、全国7つの登文会が一堂に会し、情報交換会によって問題意識の共有化を図り、さらに、全国の登文会が連携して取り組むことの重要性を確認する場としてシンポジウムを開催し、登文会の活動をPRするとともに、全国組織の設立にむけた検討を行おうというものです。

東京、秋田、群馬の登文会では共同で文化庁に土地の固定資産税に対する要望書を提出するなどの動きもあり、この11月には東京登文会の呼びかけにより、全国の登文会が東京に集まることになっています。本助成金を有効に活用することによって、全国組織の設立につなげていければと思います。さらに、このような活動が他県での登文会の設立につながることを期待します。



### 登録文化財探訪 旧岡田家住宅（北海道旭川市）

愛知登文会副会長 小栗宏次

完成までに2年を要し、見積りもない建て方と呼ばれ贅を尽くしたこの建物は、昭和8年、酒蔵のオーナーの自宅として建てられました。主屋外観は洋風ですが、玄関ホールや応接室等は数寄屋風の座敷で、玄関のステンドグラスや階段廻りなどにアール・デコ風の意匠が凝らされており、旭川を代表する歴史的建造物の一つです。解体の危機にあった時、地元の

経済界や市民により保存運動が行われました。この運動は後に旧岡田邸200年財団として法人化され、寄付による岡田邸の買い取り、修繕を実施し、2012年には国の有形文化財建造物として登録されました。

旭川と言えば旭川動物園の「行動展示」が有名ですが、この発想で、旧岡田家住宅では、



▲旧岡田邸主屋（北海道旭川市）

博物館のような「静態保存」ではなく、建物を生かし、新しい息吹を与える「動態保存」の手法により岡田家住宅を200年保存活用しようという試みが進んでおり、地元の蕎麦粉を利用して蕎麦料亭「おかた紅雪庭」として、昼夜の食事はもちろん、結婚披露宴や各種会合、法事や慶事など、様々な場面で利用されています。

保存活動を進める高橋富士子さん（旧岡田邸200年財団理事長）は、「活動を進める上で、いろいろな課題が発生しますが、そんな時、なかなか相談できる人がなく、愛知登文会のような活動は文化財保存の上でたいへん意義深いものです。北海道にもそうした活動ができるといいです。」と言っておられました。



▲旧岡田邸200年財団 高橋富士子理事長

### 編集後記

今号では、文化庁補助事業の報告を始め、文化財に関わる専門家の方々による寄稿文を掲載いたしました。また、愛知登文会便りでは、都府県を越えた“登文会としての”連携について、近況報告をいたしました。今後も当ニュースレターやホームページ、Facebookを通じて皆様に情報発信してまいります。

次号では、「登録有形文化財 特別公開 2016」についてご報告いたします。引き続きご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

### 愛知登文会ニュース 第15号

発行日：平成28年11月10日

発行者：愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会  
〒461-0025 名古屋市東区徳川一丁目10番3号

(一財)名古屋陶磁器会館内

TEL 052-935-7841 FAX 052-935-9592

E-mail info@aichi-tobunkai.org

URL <http://www.aichi-tobunkai.org>

FB <http://www.facebook.com/aichi.tobunkai>